

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版



女勇者  
フアリス  
穢きれた王家の血

小説 犬杉和馬

挿絵 あいざわひろし

プロローグ	勇者ファリス	006
第一章	奪われた祖国	025
第二章	第一の刺客	038
第三章	公開魔獣肛姦	084
第四章	捕らわれた勇者	126
第五章	魔王懐妊	158
エピローグ	魔王の花嫁	204
随ちた勇者の夢		227

## 登場人物紹介

Characters



### ファリス・エルフィリア

かつて魔王を滅ぼした勇者の末裔にして、聖王国エルフィリアを統治する若き王。美と気品に溢れる麗姿と武勇、公正な統治によって臣民に慕われているが、王であるために女という本来の性別を秘密にしている。

### シュライン・デル・ヘルガー

自らの血族を抹殺しバルトレギス帝国の王位を篡奪した男。卑劣で臆病、そのうえ権力と名声に強い執着があり、ファリスの名声と血筋に対して憎悪ともとれるほどの妬みを抱いている。

鈴口でぴったりと子宮の入口に口付けし、砲塔がその奥に狙いを定めている。逃れようにも秘唇の入口から子宮口までを男根で串刺しにされ、足腰には既に力が入らない。赤子でもあやすように男の胸に頭を掻き抱かれ、秘奥にペニスの姿形を刻み込まれていく。

そして……。

「ひいぐううウウウウ——ッ!!!」

思い出したくもない。生涯初めて自分を屈服させたあの忌まわしい愉悦が、不浄の穴から怒涛の如く吹き上がった。あの尻穴を内側から揉み解されるような異形の肉悦、子宮を裏側から舐めまわされるような背徳の恍惚がファリスの未熟な性感を鷲掴みにする

「ふふふ、そろそろ準備が整ったようだな。もう間もなくお前の身体は余の思うがままだ」  
「そ、そんな……ひぐあつ、そんなあああつ!!」

男に貫かれたまま、強烈なオルガスムスを尻穴で味わわされる少女に、悪魔の声が囁いた。同時に再びファリスの直腸内で何かが身震いするような重低音が響き渡る。

臉の裏を閃光が幾度も走り、脳内で無数の星が弾け散った。甘美な稲妻が背筋を支配し、熱を帯びた両方の粘膜から止め処なくいやらしい液体が溢れ出す。

（お、お腹の中が震えて……ま、また……またお尻熱い……お、お尻の穴で……気持ち……気持ちいいなんて……）

はしたない想いが最後の引き金を引いた。腰が大きく跳ね、女の奥深くからジュワリと

何かが溢れてくる。肉の襷が擦れるたびに衝撃は色を帯び、次第に狂おしい快樂へと変わっていった。女の弱みを知り尽くした手管が、小生意気な女の泣き所を責め尽くす。憎い男の男根に、自分の中の女が舐けられていく。

「あ、あんっ、あはああんっ、すご、だめ……流される……いやら、こんなことって……」  
向き合う男の胸に縋り、額と胸をその広い胸板に押しつける。逞しい胸筋にぶつかつた乳首が激しく擦り上がり、胸の内側を鋭い電気信号が走り抜けた。

どんなに足掻いても、底なし沼に捕らわれた獲物のように、徐々に深みへと捕らわれていく。抗いがたい愉悅の吸引に引きずられ、穢れ一つなかつた肉体も、潔癖だつた心も、清らかな魂さえも破滅の闇へと墮落していく。

「さあ、もうすぐだ。もうすぐ……もうすぐお前は余のものだ」

肉棒の先端で膣肉を捏ねくるような腰使いに、子宮の深い部分で快感が雷光の如く閃いた。射精欲求を漲らせ、ギンギンに硬直したペニスがファリスの茹で上がった粘膜を激しく掻き回す。

仰け反り綺麗なアーチを描く背中を抱き寄せ、さらに激しく真下から突き上げる。深まる繋がり、幾度も出入りを繰り返す男のペニスに子宮の入口を執拗に刺激され、意識が何度も真つ白な光の中で途切れかけた。

「あっ、やっ、そ、そんなどうしてえ!! ひっ、やあ、うそ、嘘オッ!!」

初めて男を受け入れた筈の肉体のあまりな反応に、心底から狼狽する。破瓜の痛みが既に駆逐され始めていた。あれほど激痛を訴えていた筈の女性器から、代わりとばかりに夥しい量の肉悦を送り込まれてくる。

たとえ死に勝る激痛であっても耐える自信はあった。だが心を焼く夥しい量の激悦は、そんなファリスの覚悟さえ鼻で笑い、その潔癖な心を惨めに貶めていく。

ギシッ、ギシリ、ギシギシッ!!

激しい動きに頑丈な玉座が軋みを上げ、濡れた泥を掻き混ぜる卑猥な音と狂おしいほどの快楽に漏れる嗚咽が広間に木霊する。

自分の肉体が曝す痴態にファリスの誇り高い心が切り刻まれていく。自分が何を欲しがっているのか肉体は理解しているのに、頭がそれを否定する。息が苦しいと、喉は空気を求めて必死に喘ぐが、身体が欲しているのは酸素などではない。

真下からの激しい突き上げに、小柄な女勇者の肉体が荒波に翻弄される小船のように揺れ動く。亀頭の先端で、子宮の入口あたりに狙いを定め執拗に小突き上げた。

「あ……ぐっ、奥に当たって、ひ、響くう……壊れえ、壊れてしまっ!!」

怪しげな魔術によって覚醒を促され、子作りの準備に忙しい胎内を肉棒で小突き回される。灼熱に燃える子宮の奥壁がしきりに疼きを上げ、膣の震えが全身の隅々へと快楽の波紋となって伝播した。

ペニスを使つた胎盤マッサージは少女の肉体を母胎として確実に覚醒させ、排卵が始まつたのだろう。子宮内の熱は際限なく高まり、神経が刃のように研ぎ澄まされていく。

「い、いやだ。こんな奴の子を孕むのは!! ゆ、許し、許して……あつ、お願い。もう許してええええええええええ!!」

自身の肉体の変化を凍りつくような恐怖となつて知らされ、あの気高い勇者がついに気弱な少女のように懇願する。勇者としての誇りも、王としての矜持も、この男の子を孕まされると言う禁忌とおぞましさの前にはあまりにも無力だった

「遠慮することはない。準備はもうじきできる。そうしたらお前の胎内なかにたつぷり、余の子種を注いでやろう。頑張つて元気な子を産むのだぞ」

強気な少女が己の誇りを捨ててまで絶る懇願に、嗜虐性を刺激され陰湿な笑いを上げる。絶望に震える意識は、すぐさま下半身から迸る愉悅の渦に呑み込まれた。青ざめた美貌が、瞬く間に紅潮し、恐怖の表情が快感に蕩ける。父が、祖父が、先祖たちが代々守つてきた玉座でその血を徹底的に辱められてしまう。

「そ、そんなあ!! ふあつ、ひうあつ!! やつ、やあつ、またお尻があ!? お、おひり、いやあ、お尻らめええええええええ!!」

そんな意地も誇りも掻き消す震えが直腸の内側から湧き起こる。腸粘膜から響く魂が爛れるような闇色の波紋が、子宮から生まれる愉悅のさざ波と混じり合い、漆黒の波濤とな

って絶頂の大海へとファリスを押し流していった。

ズクン……ズクン……ズクン!!

痛いほどの肉の疼きが間もない胎盤の完成を知らせてくる。柔らかくほぐれ、愛液にふやけきった膣壁は泡立つ愛液とともに収縮を繰り返し、子宮口が絶頂を求めてねだるよう亀頭の先端を咥え込んだ。

「さ、さあ、イクがよい。余の精を存分に胎内で受け止め、ウツ……：歡喜の果てに我が子を孕むがよい!!」

肉棒から跳ね返ってくる快楽に、皇帝の余裕も既がない。ファリスの腰を引き寄せ結合を深めると、射精欲求に痛いほどに脈動する射精口を子宮の入口へと強く押しあてる。子宮口と先走りに濡れた先端がぴったりと粘着し、そのまま玉袋に溜まりに溜まった子種汁を解放した。

ドブツ!! ブシユアアアッ!! ドピユツ!! ドビユウツ!!

「アヒツ!! やアッ!! らめ、ひや、だめええええエーッ!!」

紅蓮の火柱が下から上へと垂直に、ファリスの肉体を刺し貫く。火傷したように疼く無垢なる胎盤目がけ、ついに悪魔の液体が解き放たれたのだ。沸騰した液体の奔流に子宮は風船のように膨れ上がり、子種液は熱く子宮壁にへばりついて、離れようとしなない。

「あっ、出てる……お腹の中に……やあ、出て……あああッ!! 出てるううっ!!」



そんな未来は想像さえしたくない。だがどれほど拒絶しようと、否定しようと、その悪夢の未来は着実に、現実のものとなり始めていた。

そんな悲痛な嘆きさえ無視して、半透明の口吻の中を銀色に輝く光が通り抜け、魔物のお腹の中へと消えていく。そのたびにファリスの細腰がまるで情熱的なダンスを踊るように激しく動き、蝶魔物を振り落とそうとするかのように跳ね回った。

『あらあら、激しいわね。ここが弱いのか？ あら？ ここも弱いみたいね』

「ひはあん!! そこ……そこおお!! そんな、力が抜けて……ああ、いい、凄い、凄いいい……!!」

だが蝶魔物は逃げ回る花を執拗にそのストロー状の口吻で追いまわし、その蜜を一滴残らず吸い上げるべく吸引を繰り返す。お尻の中は際限なく熱を増し、力を吸い上げられるたびに感度を際限なく増していく。

そのたびにゆっくりと開いていく淫花。ファリスの腰が跳ねるたびに、黄金に輝く花粉が闇の中を舞い、蝶の羽から零れ落ちる青白い鱗粉がそれに混じり、むせるような花香の中、一種幻想的な美しさを醸し出していく。

『まあ、どんどん綺麗な花が咲いてくるわ。蜜もどんどん美味しくなっていくし、ウフフ、御馳走様』

「ダメエ、開く……あつ、開くはあああ……!! アヒイいいッ!! は、あつ、花開い

ちや、イヤダアアアッ——!!」

駄々を捏ねる赤子のように首を左右に振り、白銀の髪が踊るように宙を乱れ舞う。だが、吸われるごとに鋭さを増す肛悦は、そんな虚しい懇願など聞いてはくれない。魂がアナルから通り抜けていくような虚脱感、理性も、意地も、怒りも、同じように吸い尽くされていくのではないかと言う絶望と諦めが心を支配していく。

チュルチュルチュルチュルチュルツ!! チュチュツ!! ギュヅユヂユズズ!!

『うーくん、デリシャス!! 喉越しもよくて最高ヨ!』

「ヒイアア——あ——あ——ッ!!」

卑しい吸引音とともに長く、長く尾を引く嬌声が室内に木霊する。快樂の稲光は幾度も背筋を往復し、魔物に尻穴を吸われながら勇者は何度も何度も卑しい絶頂に達した。快樂を生み出す玩具と化した排泄器官は、快樂の貴賤など選びはしない。

卑猥なダンスを踊る腰の動きに、膣内がさらに肉棒で擦れ、膣と尻で快樂が天井知らずに上昇していく。いつまでも降りられない法悦の頂、頭の中で七色の閃光が華々しく輝きを放ち、おぞましい愉悅にいつまでも、いつまでも泣かされ続ける。

「はあ……はあ……はあ……」

一体、どのくらい時間が経ったのだろうか。無限とも思える恍惚の時間が過ぎ去り、頭が冷えてくると先ほどまで自分が曝していた痴態が否応なく脳裏に蘇ってくる。思わず

舌を噛み切りたくなるほどの自責に鹵軋りする。だが、今や皇帝の腹に両手を突いたまま身体を支えるのがやっと、あまりの無様さに、屈辱の嗚咽に身を震わせる。

「あははは、いい様だなファリス様よ」

「ふふふふ、お久しぶり……言うべきですかね。ファリス王」

そんな中、二人の男が高笑いとともに寢室に入ってくる。その内の一人は身長ならヘルガーとそう変わるまい。だがその体重は皇帝の三倍は軽く越えるだろうと言う肥満体だった。脂ぎった醜貌を笑みの形に歪め、欲望にぎらつく瞳をファリスへと向けている。

そしてもう一人は、対照的に痩せ細った男だった。鶏がらを思わせる細い四肢に、アラが透けそうなほどの貧弱な身体。だが落ち窪んだ瞳にぎらつく光はデブの男と変わらずおぞましい欲望に満ち満ちていた。

「はあ……はあ……はあ……あ、貴方たちは……」

決して好意的ではない。むしろ下卑た嘲笑を浮かべる二人の男のことをファリスはよく知っていた。虫の息のような細かい息の下、辛うじて小さく言葉を紡いだ。言葉を失うファリスに追い打ちをかけるようにヘルガーがその耳元で囁く。

「紹介はいらぬか？ 余の忠実な臣下だ。名前は……」

「はあ……はあ……そんな、まさかファネビス国防大臣、セリルド騎士隊長……？」

信じられないものを見たファリスがただ呆然とその男たちの名を呟いた。どちらもファ

リスの祖国、聖王国の重臣たちだった。権力欲や自尊心が強く清廉潔白なファリスとよく衝突することはあったが、父の代から仕えてくれた二人に、ファリスは他の臣下たち同様に深い信頼を寄せていた。

「ま、まさか……あ、貴方たち……」

「おお、さすがはファリス様。もうお気づきになりましたか？ 御名答です。私たちは聖王国より帝国を選んだのです」

慇懃な口調で肥った男が頭を下げる。もしも、もしもだが、敗北した後には帝国に降ったのならば、ファリスは決して恨み事など言わなかっただろう。大切な部下たちとたとえ袂を分かとうとも死んでしまうよりははずっといい。だが、そうではないと直観的に悟っていた。「解っているようだな。姫様、そうさ。俺たちが帝国の手引きをしたんだよ」

痩せた男は敬語さえ不要とばかりに、薄ら笑いを浮かべながら、ファリスの予想を肯定する。思えば不自然な点があった。いかに王であるファリスが不在であり、主力の騎士団が留守であったとは言え、聖王国の王城が落ちるにはあまりにも早過ぎる。

「あ、貴方たちは……裏切ったというのか？ 国を、仲間を、民たちを売ったというのか？」

その事実を突きつけられてなお、信じられないと言った瞳で見つめる。帝国の侵略の折、聖王国の騎士や臣下たちは決してその卑劣な裏切りに屈しようと思わず、そのほとんどが殺され、城下に首を曝された。帝国の支配下に置かれた民たちは、人を人とも思わぬ家畜同

然の扱いを受け、今もなお貧困と迫害に苦しめられている。

だが、自分たちを呆然と見つめるかつての主に向けられるのは冷たい嘲笑と暴言だけだった。

「はっ、強い者には巻かれる。当たり前のことじゃねえか。あんたには恨みもあるしな」

「わ、私に恨みがあると言うのなら、なぜ言ってくれなかったのですか？　なぜ、私に直接その怒りをぶつけてくれなかったのですか？」

自分に非があるならば改めるように努力した。王としても、個人としても謝罪をしただろう。それなのになぜ、こんな薄汚い裏切りなどに手を染めたのか？　わずかでも良心の呵責があるならば心打たずにはいられない悲痛な問いかけ、だが男たちはその顔に浮かぶ薄ら笑いを消そうともしない。

「ファリス様は、俺たち貴族よりも下賤な民衆どもと仲良しと来ている」

「何度も忠言した筈ですぞ。それなのに貴女ときたら下級民たちのことばかり考える」

「当たり前です!!　民あつての国。それを蔑ろにする言葉など聞ける筈がない!!」

横領も、賄賂も許さず、最低限の税で腐敗のない政治を目指すファリスと選民意識の強い一部貴族たちとの軋轢は確かにあった。だがファリスの根気強い説得と誠実な為人ひととなりに、やがてそう言った者たちの多くも、その高潔な考えに賛同していった。

だが、決して全員が心動かされたわけではない。この者たちのように根柢のない血筋の

優位性を信じ、民を下賤と称し、自分の利益のために踏み台とすることに一切の疑念も躊躇も抱かない者たち。彼らにとってファリスと言う存在は邪魔以外の何物でもなかった。

「だから我らは貴女を見限ったのですよ。そして我らのことを正当に評価していただけるこの方に協力させていただいたのです。その上憎い貴女を苦しめることもできる」

浮かんだ笑みを微塵も崩すことなく大臣はゾツとするほど酷薄な言葉を告げる。その言葉聞いてファリスは目の前が真っ暗になる思いだった。ただ自分の欲望のためだけに、ファリス自身を苦しめるためだけに、この男たちは祖国の全てを裏切ったのだと言う。

「そんな……そんな……」

怒りよりも、憎しみよりも、深い悲しみが心を支配する。彼女は信じていた。意見の違いはあろうとも、自分に仕える臣下たちを、騎士たちをわけ隔てなく信頼していたのだ。その彼らにここまで疎まれ、恨まれていたと言うことが、裏切られたことなどよりもずっとファリスの心を傷つける。それまで自身を支えてきた信念の全てを、生き様を全て否定されたも同じ絶望が心を暗雲の如く覆う。

「へへへ、それにしてもあのファリス王が実は女だったとはなあ。すっかり騙されてたぜ」  
「ええ、まったくですねえ。本当にファリス王もお人が悪い」

王家の中でも秘中の秘、限られた重臣にしか明かされていなかったファリスの性別。そんな事実さえも、身勝手な逆臣たちには屈辱に感じるらしい。慇懃な口調や薄ら笑いの中

にも暗い怒りが感じられる。

「ですが、まあお互いせつかく生き残ったのです。過去の遺恨は忘れ仲良くしようではありませんか。ねえ」

脂ぎった脂肪の中に埋もれてしまいそうな目を欲望にぎらつかせながら大臣は優しげに嘯く。その言葉とは裏腹に、その瞳には友好的な感情など微塵も宿ってはいなかった。

「っ、何を……この期に及んであなたは一体何を言っているのですか!!」

自身の裏切りによって多くの上司も、同僚も、部下も死に追いやった事実を忘れたかのような言葉に、悲しみに染まっていたファリスの瞳は激しい怒りに燃え上がる。

「おう、怖い。怖い。さすがは勇者様だな。だが皇帝陛下のチンポを美味しそうに啜え込んだままじゃな。可愛いもんだぜ」

「くっ……」

接合部を覗き込むように屈みこむ男の下卑た視線に、ファリスは悔しげに唇を噛みしめると顔を背けた。未だ皇帝に貫かれたまま、その腹の上に跨がらされているファリスの姿にはかつての覇気も、迫力も感じられない。紅潮した白磁の肌に、ほつれて額に張りついた銀の髪、その姿は何とも言えぬ色香を醸し出して、男の目を楽しませていた。

「そのような怖い顔などされずに、お美しい顔が台無しですぞ？」

「そうそう、時間はたっぷりとあるんだ。仲良くしようぜ？」

下卑た笑みを浮かべながらベッドの上が上がってくる男たちの狙いを悟り、その欲望の深さに眩暈さえ覚えた。裏切ったとは言えかつての主君を辱めようと言うのか？ 湧き起こったのは怒りよりもやはり悲しみだった。

「ふふふ、余だけ楽しむのも悪いからな。余の忠実な臣下もお前を愛でたいとのことだ」  
男の言葉を合図としたように二人の男がベッドに上がってくる。計ったかのように同時に左右から突き出される二本のペニス。鼻を衝く性臭に美貌を歪めながら、ファリスは鋭い視線を向けたまま何もしようとはしなかった。

「こ、こんな……汚らしい。何の真似ですか!!」

「おお、素晴らしい目ですな。先ほど陛下や魔物を相手に派手によがり狂っていた人物と同じとは思えませんあ……アハハハハッ!!」

醜い肉棒を目の前に気丈な態度を崩さないファリスに、肥った男が慇懃に囁く。

「へ、さつきまで散々尻振ってた淫乱女が気取りやがってよ。ええ？ 俺たちのモノには奉仕できないってか？」

痩せた男が苛立つよう陰湿な視線をファリスに向ける。屈辱に赤く染まった頬で、それでも視線は射るように男たちを睨む。だが、そんな強気な表情も長くは続かない。

『そうですよお。その男たちを慰めて差し上げなさいよ。ねえ、ファリス様……』

そっと背後から囁かれた魔物の猫撫で声に、一瞬で背筋が凍りついた。忘れたわけでは

ない。自分を背徳の恍惚で貶めた魔物のことを、その魔物が未だ自分の背後に居ることを、いかに悲しみに暮れようと、怒りに猛ろうと忘れられる筈がなかった。

『それとも、私にもっとお尻を擦って欲しいですか？』

「ヒ……ッ」

魔物の明らかな脅迫に小さな悲鳴が上がり、怯えたようにお尻がビクリと震える。ファリスはこれまで卑劣な脅しなどに屈するつもりはなかった。唯一の例外は人質、自分以外の存在の命を盾に取られた時だけだ。

だがあの自分が自分でなくなるおぞましい感覚をまた味わわされる。魔物に尻を掘られ、啜られるか。薄汚い裏切り者に奉仕するか。あまりに屈辱的な選択を強いられ、生まれて初めてファリスは恐怖の前に屈したのだった。

「……………っ」

震える手がゆっくりと伸ばされ、熱く盛る男たちの性器に触れる。少女の手の心地よさに、二本の男性器はまったく同時に小さく跳ね上がり、思わずファリスは伸ばした手を引っ込めていた。

（あ、熱い……。それにビクビク震えてて……。これが男の人の……）

屈辱に震える意識でそんなことを考える。かつて広場で公開陵辱された時は、じつくりと観察する暇も、余裕も、心算もなかった。思えば幼い頃に父を亡くしたファリスが生ま

れて初めてはつきりと目にする男の生殖器だった。

急かされるように鼻先に突き出される二本の性器に、再びおずおずと両手を伸ばすと、燃えるようなその熱を掌全体で感じさせられる。ドクドクと激しい血流に脈打つ肉茎をその手で掴み、初めて手で触れる異性の性器に、刹那屈辱さえ忘れて見入ってしまう。

鼻を衝く先走りの精臭、ファリスの痴態を見せつけられ、既に興奮は臨界に達していたのだろう。我慢汁を涎のように垂れ流す鈴口は、呼吸するように開閉を繰り返している。

「ほらほら、ぼうつとしてないでその可愛いお口で私の息子に奉仕してくださいよ」

大臣の厚かましい催促の言葉に、ファリスの美貌が怒りに赤く染まる。だが蝶魔物のストローに脅しつけるように花の中央を突かれ、後ろの蕾から迸った電流と恐怖に全身が縮こまった。

「く、ううっ」

選択の余地などない。魂が爛れるようなあの背徳の快感に墮とされるくらいなら、死んだ方がマシだった。

悪臭に美貌を歪めながら大臣のペニスに顔を近づける。でっぷりと肥った体躯に合った太さの割に、奇妙に短いペニスは、血管を網の目のように走らせ、醜い凶体を興奮に震わせていた。瑞々しい桜色の唇が怯えるようにゆっくりとそれに近づき、わずかな躊躇の後、にその汚らわしい先端に触れる。

「お、おお……っ」

冷たく柔らかな唇のキスの感触に、大臣の口から快樂の溜め息が漏れる。屈辱に震える小さな舌が肉竿を這い、そのあまりに稚拙な動きが逆に興奮を煽った。

騎士隊長のペニスを握る手もゆっくりとその幹を抜き始める。テクニクなど欠片もない。ただ上下に擦るだけの単調な動きに、大臣とは逆に不満げに鼻を鳴らす。だが高貴なる身分の相手に、それも絶世の美少女であるファリスに奉仕させていると言う達成感が、その興奮を何倍にも高めていた。

「んん……ちゅむっ……はっ……あううん……」

手の中で熱く滾る怒張に舌を這わせる。ビクビクと脈打つそれはまるで生き物のようで、その奥に漲る子種の生命力をグローブ越しに感じていた。

(なんて熱い……まるで火傷しそう……)

抵抗も、拒絶も、自害さえ許されない逃げ場のない肉欲の檻。そこに捕らわれた勇者の肉体と心は徐々に追い詰められ、擦り切れていく。誇りを切り刻まれ、矜持は泥に塗れ、何もかもを無残に奪い尽くされた。

「へへへ、いい様だな。勇者様よ。ほおら、俺の息子もよろしく頼むぜ」

「だ、ふあれが……うん、むウ……汚い……うぐううっ！」

左の騎士隊長がせつつくようにペニスを突き出し、先走りに濡れる龟头をファリスの頬



に押しつける。鼻を衝く精臭に誘われるように、口に含んでいた大臣のペニスを吐き出し、もう一つのペニスに舌を這わせた。

舌を刺す酸味が不思議と美味しい、鼻が曲がりそうな臭いさえどこか心地よく思い始めていた。男と女の汗と汁の混ざり合った臭いに満たされた空間がファリスの心をゆっくりと、しかし確実に蝕んでいく。

「うっ、ゆ、勇者様……いえ、もう王妃様でしたね。ふふふ、ご懐妊おめでとうございます。あうっ」

ファリスの右手にペニスを扱かれている大臣が、あまりの心地よさに陶醉した表情で屈辱の祝辞を述べる。わずかに湧き起こった怒りは、しかし、真下から突き上げるヘルガーの剛直によって膺から迸った歓喜の内に霧散した。

周囲を欲望に猛る男たちの体温に囲まれ、気化した汗と精で蒸し風呂と化した中で朦朧としたままだ本能に任せて腰を振る。肉の歓喜と心の苦痛がドロドロに混じり合い、籠る精臭と汗の臭いに愉悅に侵された頭がくらくらと揺れ動いた。

(あ……ああああ……わたし……どうして……?)

鼻を衝く異臭が心地よいと感じてしまう。掌に感じるペニスの脈動感に胸が高鳴ってしまふ。口の中で膨れ上がる肉塊に進んで舌を這わせ、苦い先走りの腺液に恍惚の表情さえ浮かべていた。

真下からの突き上げのたびに腰の中心を爆ぜるような愉悅が支配する。左右の男たちの求めに応じて、汚らわしい性器に交互に唇を捧げることさえ、被虐的な悦びを覚え始めていた。

「うっ!!」

「グッ!!」

ドピュッ!! ブパッ!! ドビュッ!! ブシャッ!!

左右の二人がまったく同時に、歓喜の呻き声を上げる。口内で炸裂した白濁熱に、意識が一瞬白に染まり、肌と髪に降り注ぐ欲望のシャワーに心と身体を内と外から焼き焦がされた。

ビクッ、ビクッ、ビクッ、ビクウウッ!!

言葉もなく、ただ背筋を小さく仰け反らせながら、軽い絶頂に全身を震わせる。膣内でも、口内でも、肌の上であっても精液を浴びるだけで悦びを覚えてしまう。そのような忌まわしい身体に作り替えられてしまった自分の身体が、無性に情けなく、悔しかった。

頬を伝い落ちる気持ちの悪い粘液、口内で肉棒が躍動するたびに喉奥を撃つ粘塊、そして食道を流れ落ちるおぞましい流動食に身体の内と外から存分に汚されていった。

「へへへ、勇者様が俺らのザーメン浴びてイっちゃまってるぜ」

騎士隊長はファリスの口内から引き抜いた肉棒を抜きながら、その美貌や銀色の髪に尿

「ひいあああああああ——っ♪」

歡喜の絶叫が喉の奥から迸った。子宮の奥まで達した肉ミミズたちが私の蜜を吸い上げる。大きく口を開けていたヴァギナがまるで吸いつくようにその口を閉じ、締め付けを増した私のオマンコで糸ミミズたちはむしろ喜々として暴れまくる。

子宮の中を無茶苦茶に掻き回され、さらに質と量を増す私の恥ずかしい液体。涸れることのない蜜を延々と吸いまくられ、十秒と間を置かず連続したオルガスムスに突き上げられてしまう。

腔粘膜に走る凄烈な快美の稲妻に私の身体は慣れるどころか、日増しにその爛れた愉悅の素晴らしさを教え込まれていった。

「ああん、もつと、もつとお、もつと吸ってくださいいい!! ひいうっ、もつと私の愛液吸いまくってえええ!!」

垂れ流されるメスの本音、恥じらいなんてとつくの昔に忘れた。理性の制止が聞こえなくなつたのは一体いつだったのだろうか？

私はなんて愚かだったのだろうか？ こんなに素晴らしい快楽を必死になって拒絶していたなんて……。抵抗できるわけなんてないのに、抵抗する必要なんてないのに、あまりにも無駄な足掻きをしていたかつての自分を思い出し笑ってしまう。

———今までの私は何だったんだろう？

他人のためにと頑張ってきた。父祖に誇れる自分を貫こうと性を偽り、王を名乗り、勇者として剣を振るってきた。その全てが遠い昔のように思える。大切な民を守るために命を賭けた。愛する祖国を守るために人生を賭した。あと少し、あとほんの少しでその努力は報われ、世界は平和になる筈だった。

———なのに、それなのに……。

自分が産んだ魔王が人を殺していく。自分が産んだ魔王の子供が世界を壊していく。こうして今も、自分から吸い上げられた勇者の力が、破壊と殺戮に利用されているのが解る。世界を守るべき勇者の力が、破滅と絶望を振りまいていく。

「すぐ、凄いの、お、いっぱい吸われて……気持ちよ過ぎてどうにかなくなってしまおうっ!!」  
ちゆるちゆるちゆるちゆる……ズルズルズルズルズルッ!!

半透明のミミズの管の中を私の愛液が流れていくのが見える。そのたびに膣粘膜をどうしようもない愉悅の電気刺激が走り回り、子宮が疼くように収縮を繰り返した。これがこの部屋の食事だ。今は愛液だけだが、この部屋は私の汗も、涙も、排泄物さえ糧に変える。私の恥ずかしい何もかもが吸われ、食べられ、そんな行為にさえ私はどうしようもなく感じて愛液を溢れさせてしまう。そして止め処なく溢れる恥ずかしい液体をまたも吸われ、それが快楽を生み出す。止まることのない無限ループ、潰えることのない至高の法悦に私はいつまでも酔い痴れた。

「はあ……あん……うう……」

この部屋の食事が終われば次は私の番だ。壁の一角を飾る人面痣がゆっくりと盛り上がった。触手の先端に人の顔を取り付けたような不気味な光景。だが私にとってはもう慣れた光景だった。その顔がかつての帝国皇帝シユライン・デル・ヘルガーの顔であることさえ驚くべきことではない。

魔物に、魔王に、魂まで利用し尽くされた愚かな男。かつて栄華を誇り、世界で最も広く強大な帝国の長は、私というペットの世話をする飼育係にまで墮ち果てていた。その姿に憐憫や怒りを感じることももうない。当たり前だ。私もまたこの部屋に飼われるペットなのだから……。

「ん……ちゅ……」

重なり合う唇、舌を絡み合わせる濃厚なディープキス。かつて憎んだ男との口付けにももはや忌避感はなかった。だってこれはただの食事なのだから、ご飯のたびに嫌がる人なんていない。

ドロリと食道に流し込まれる食事。男の歯で噛み砕かれ、咀嚼され。唾液で攪拌され、それどころか半ば胃液で溶かされた生暖かい流動物が口内に流し込まれる。それが日に三度行われる私の食事の全てだった。

—— ああ、美味しい。なんて、なんて甘い……。



かつての私ならば吐き気さえ催しただろう口移しの食事にさえ恍惚を覚える。舌が蕩け  
そうなほど甘い。菌莖を舐められるたびに口内に走る痺れ、私は積極的に舌と吐息を絡め  
合いながら、熱く甘い食事を続けた。

「くちゅ……んんちゅ……あんっ」

口の粘膜を通して送られてくる甘い愉悅に私はどこまでも酔ってしまふ。この男の私に  
対する異様なまでの執着感は少しも薄れていない。

燃えるような吐息が混ざり合い、いつもながらの情熱的なキス。二つの舌が恋人同士の  
それのように熱烈に絡み合う。小さく鼻を鳴らし、ダンスを踊る舌が淫らな唾音を奏で、  
私たちは積極的に唇を貪っていた。

口の中全てが気持ちいい。唇の裏を甘噛みされると後頭部のあたりがピリリと痺れる。  
菌莖や菌の一枚一枚を丹念に舐めくすぐられるのが癖になってしまふそうだ。憎悪も、怒  
りも、悲しみも何もかもがこの快感の前には無意味だった。

ズブウウウッ!!

「あひいいい——ッ!!?」

食事の最中に唐突に背後を襲った衝撃に声もなく背筋を反らした。後ろの穴に肉ででき  
た三角錐が半ば以上突き込まれている。腰が跳ねるように浮き上がり痙攣を繰り返すが、  
散々に貫かれてきた蕾は呆気ないほど簡単に異物の侵入を許し、いやらしい悦びに打ち震

えていた。

ズツ、ズズズズツツ……。

「ふうあああゝゝゝつ!! 尻があ、お尻の穴が吸われ、まら吸われるふうううゝゝ!!」  
鈍いバキューム音とともにお尻の穴からの吸引が始まった。腸粘膜を引きずり出されるような苛烈な吸引に苛め抜かれ、吸り出されていく虚脱感と肛悦感に、私は惨めに鳴き乱れる。私の身体の中で真っ先に開発し尽くされたアナルは、今なお最強の快樂兵器だ。どんな激しく淫らな責めも受け止め、快樂を垂れ流す。

お尻の穴を吸って、吸って、吸いまくられて、首と尻を滅茶苦茶に振って乱れ狂った、筋肉痛になるほどに責め立てられた括約筋が上げる悲鳴も、腸液が涸れるほどに吸い尽くされた粘膜がヒリつく痛みも、ドロドロした被虐の愉悅の中に溶けて混じっていく。

秒単位で踊らされる肛虐絶頂のあまりの激しさに、快樂と苦痛の境界がどこにあるのかさえ解らなくなっていく。

「はあああんつ、ふうあああつ!! もっと、もっとおとおお!!」

—— お尻の穴を吸われまくって感じる変態勇者……。

それが今の私だった。糞便と一緒に力になって力を吸引される背徳の極み、かつてならおぞましさに気も狂わんばかりの行為にさえ、今の私は恍惚を覚えてしまう。あれほど忌み嫌い、恐れていたアナル責めに、今は期待のあまり愛液を垂れ流す有り様だ。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

